

超高齢化社会への対応



在宅診療中の松尾医院長

長寿世界一の国・日本は超高齢化社会へ向け高齢者のクオリティ・オブ・ライフ(生活の質)向上を目指し、福祉、介護を始めお年寄りが快適に暮らせる、住いや街づくりの対策が急がれる今日です。

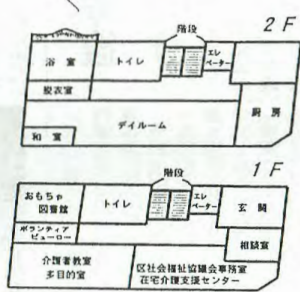
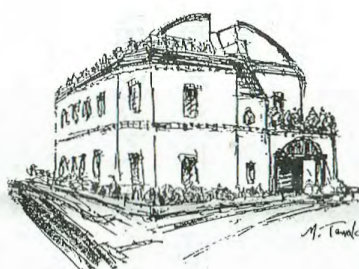
福祉機器・住宅研究会 由紀院長は在宅介護と、高齢化社会が進行して住宅改造について講演を行く、老人福祉施設の現状について、5月13日の定例会を阿倍野在宅サービスセンターの見学後に、老人医療在宅ケアを推進するために必要な住宅改造や必要として住みつけられる阿倍野区「をめさし」地域住民や区役所をはじめ関係機関とともに、その一翼を担う活動の核になるサービス

ンターである。活動内容は、在宅介護支援、デイサービス、ホームヘルプサービス、訪問入浴サービス、食事サービス、区ボランテアビュロ、訪問看護ステーション(寝たきり高齢者等)に対して、医師の指示のもとに看護婦等が家庭訪問のうえ、介護に重点をおいた介護サービスを提供する。病状観察、清拭、体位交換、洗濯、カテーテル等の管理、食事、排泄の介護、機能訓練(医療終了後も継続して機能訓練の必要に、心身機能の維持回復を図るための必要な訓練を行ない、日常生活の自立の援助を図る)。特に他の在宅サービスセンターにないものとして、おもちゃ図書館(障害を持つ児童や障害を持たない児童がボランティアとともにおもちゃをつづいてふれあい障害児が地域社会の一員として、生き生きと成長して行ける環境づくりを図る)がある。館内の設備は全てが真新しく老人にも障害をもつ

人にもやさしく造られている。特に厨房設備は自動洗米機や大型食器洗い機等働く人にも優しく保健衛生がらみでもすばらしいものである。また充足した時間もある。高齢者が社会がするたなか、利用者が在宅で元気に過ごせる日々を支えてくれるサービスセンターである。今後一、二年のあいだに大阪市内各区に在宅サービスセンターが設立される。

高齢化社会が進行している。今、全ての高齢者が、設備と医療の完備された施設に入居できるとは考えられない。又、長年住み慣れた地域や家で家族や知人に囲まれ老後の日々を過ごしたいと考える人もいる。高齢社会の到来とともにこうした願いは切実なものとなつていく。

このような時、在宅で医療を受けたい、心やからだに日常生活が支えられるための医療が必要である。在宅で元気に過ごせる日々を支えてくれるサービスセンターである。今後一、二年のあいだに大阪市内各区に在宅サービスセンターが設立される。



取り除く心のかきね

去る6月11日、12日にわたり青森県八戸市にある「純の家」を研究会の工藤さんと私の6人になる息子の3人で訪問しました。これは代表の澤田裕子さん、事務長の忠恵さん、事務員を含む12名のスタッフと、痴呆性の老人に限らず、てんかん、アルコール依存症などの40歳代・90歳代の20

のびやかホーム

ような事をひとつづつにねいに改善し、日常生活を不自由なく暮らすようにする。この5月、6月の例会を通して今まさに超高齢化社会で今後とも暮らす事のできない問題を我々一人一人が考え努力し、協力しあいながら問題を解決していかなければならない。

名の入居者、3匹の犬からなるとても家族的なホームで、年齢、障害に関係なく入居できます。色々と制約を受けるが満足なケアがでる。ここは代表の澤田裕子さんと、事務長の忠恵さん、事務員を含む12名のスタッフと、痴呆性の老人に限らず、てんかん、アルコール依存症などの40歳代・90歳代の20

別に畑もあり、入居者が育てた野菜が食卓に並ぶそうです。最初に入居者とスタッフの区別がつかず、私達は、昼食後パッチワークでソファアールを制作作業に参加しました。わきまを振らずに黙々と針を運ぶ鮮やかな指さきにその人の人生の重さが感じられました。

福住研会長 杉浦氏就任

初期診断強化

福祉機器・住宅研究会は、平成7年5月の定例会で杉浦氏に代表を、中北氏に副代表の就任をお願いし、定例会出席者の方々の賛同をいただきまして正式に就任いただきました。

いまだ二丁の初期診断は研究会員らと、セラピスト及びコーディネーターで実施してきましたが二丁の増加に伴い、大阪市内を数ブロックに分け、各ブロックに責任を担う、及びコーディネーターで初期診断にあたり、きめこまかな二丁の解決にあたります。今後色々と多くの行事が待ち受けていますので会員の方々の一層のご協力をお願いいたします。

こぼ 痴呆

痴呆とは、成人になってから起こる知能障害をいふ。このために、いままでできたことができなくなったり、日常生活に支障をきたして何らかの介助が必要になってくる。高齢期になると、こぼに痴呆の頻度が増加する。

痴呆性老人の「もの忘れ」の特徴は、自分の体験を忘れること、出来事の一部を忘れるだけである。たとえば、昼食を数人の友人と食べた直後、ある友人の名前をどうしても思い出せないというのが通常のもの忘れである。ところが、痴呆性老人では、昼食を忘れたこと事態をすっかり忘れるという特徴がある。

痴呆性老人のものは忘れ、記憶障害だけにとまらず簡単な暗算ができなくなったり、判断力がだめになったり、自分のいる場所がわからなくなったりするなどの知的機能のさまざまな障害へと進行していく。

痴呆の場合は、自分のもの忘れに気がつかない、自覚することができない。いわば病識をもつことができない。著しい判断力低下のために思い違いが多くなり、被害的な考え方がひどくなり、背景にある器質性脳変容のために異常な行動を示したりする。(痴呆より)

ハンディをささえるモノづくり通信

福祉機器住宅研究会
発行責任者
ボランティア
765-4041
制作協力
朝日新聞大阪本社
読者室
電話06(21)8033



事例報告

住宅改造で自立

自炊も外出も自由自在

- ★解説
- A・ニード
- B・日常生活と家屋状況
- C・解決方法
- D・改善後の状況と考察

75歳 女性
A 自立の為に自宅を改造した。自炊の為に流し台を車椅子で利用できるように。門扉から玄関まで介助者なしで電動車椅子で出入りしたい。現在の廊下では電動車椅子が自由に旋回して動けないので広くしたい。これにともないスロープも改造が必要。

B 日常の生活は、食事のしなくは自分で行けるが、外出の時玄関よりの出入り口ではできないので介助が必要。会話は十分聞き取れる事ができる。親

C 玄関先、門扉の改造は、マンショ管理室組合より改造不可能の連絡あり。門扉は現状の姿を残し、スロープも組立式という条件。この為、改造内容を変更する。改めて室内を車椅子で生活できるようにダイニングルームの床仕上げと

D 流し台は車椅子に乗る状態での自炊。外出は介助者なしで自由にでき、最近では留守番電話の音が多



炊事の支度中

くなっている。深夜の帰宅も平気です。いままでは親の家に帰るのが一番よかったが、今は、自分の家へ直接帰ることができる。

トイレに手すり2本 使用時に体の支え

Sさん 77歳 女性
A 自宅便所に手すり取り付け、介助者の労力が少しでも少なくなればよい。



てすり取り付け作業中

又、本人が使用時に体のささえにもなる。

B 脳梗塞の為軽度の後遺症と痙攣。パーキンソン氏病症状があり、自力で歩行も難しい。日中は、テレビ鑑賞で時間が過ぎる事が多い。この為臀部に褥瘡が発生する。介護は、有償ヘルパーさんと長男の嫁さんが主になり、24時間の介護をしている。居宅は持ち家で独居生活である。

C 便所出入口のL字型壁面に横手方向の手すりを各1箇所、便所床より75センチの位置に取り付け、パーパホルダーの位置変更も同時におこなう。

D 排便後の始末の時自分で手すりにつかまり体が安定するので、介助者の両手が自由になりきれいに後始末ができ、下着をはかす時も楽に介助が出来るようになった。

役に立てます定年後 覚えた技術活かす

参加者は当初、ターゲットと目ざしていた年齢は60代から70代、10歳から70歳まで幅広い参加となり、また女性の参加も多く最近のボランティア活動への熱意やDIY(Do It Yourself or Do it your self)のブームが多分に影響した結果となった。

また講師には研究会のメンバーの関保で、幅広い専門家に協力をいただき、重厚な講師陣となった。

今回は講座の前半である「大工仕事のABC」「水道・塗装の補修ABC」について紹介する。後半は「接着とシーリング」「電気ABC」「内装のABC」を次号に報告をする予定。

なお、この講座は秋に第2段の中級コースが予定されており、今後、研究会のメンバー増加につながるよう期待されている。

道具の扱い 泣き笑いも

昨年初めて二世帯住宅の仕事を通して高齢者や障害者対象の補助具に興味を持つようになった。今回の講座は基本から教えて頂けるといことで、ワクワクしながら参加しました。

抜い方、製作するパステアの図面説明後、実習開始です。脚部製作でノコギリで印を付けた所を切る作業では、ノコギリがうまく印をつけた所にあたらず何箇所もノコギズをつけてしまいました。切っているとき心は裏腹に曲がって切れていきます。早く切り終わりたいと力を入れるのですが焦れは焦る程うまくいきません。切り口は波のようになり、足板と中板の八枚を切るのに、二時間近くもか

かってしまいました。カンナで板を削る作業では、お手本を見ていた時は、すいすいカンナが動き薄い木が、とろろ昆布のように出てきます。「これはノコギリより簡単に出来るぞ。」でもカンナは、木を削らず、すいすいどころではありませぬ。カンナの刃の調整を何度もして頂いてどうにか削ることができました。出来上がった形を見ると、長方形がひし型に変わって、顔で笑って心で泣いての心境です。

私が悪戦苦闘している間に参加者の皆さんは慣れた手つきで着々と作業をこなしています。もうすぐ完成という人もいました。

道具の扱いにも慣れて、先生やボランティアの皆さんに手助けをして頂いてどうにか部品として揃いました。熱心に取り組んでいる参加者の方々の姿勢が私にとって、よい刺激となりました。モノを作ることは楽しい。そして、充実した時間です。この四苦八苦した経験を忘れずにしたいと思いました。

今までに、自分の家の現状を見たり、塗装の説明書を読んだり、塗地のいいかなど、思いながら何度も経験しました。

自分の家の日曜大工なら、多少間違えても問題はありませぬが、例えボランティアとはいえ、他家の修理をして非常識な修理をしていただければ、ちよつと格好悪いですすね。

今回は水栓金具や、塗装の基礎知識を勉強することができました。これで、少しは間違いない施工ができる。自信を持つ事ができます。受講と同時に、不足している道具類もこれから揃えていきます。道具類の収集に終わらずに、早くお役に立ちたいなと思っております。また、塗装、電気とそれだけの専門家のみなさんが講師を引き受けてくださったという形も、心強くおもっています。

或る部分はビジネスパーソンで、それに、のらねい部分ではボランティアで、というふうにするわけ、必要な人に、必要なら提供するサービスを、速やかに提供されるというシステムが、できるという大変な事です。

その中で自分も、楽しみながら、また、役立つという喜びを感じながら、なにかできるようなりたいと、思います。

借家大改造

できたグループホーム



気配設計の便所

H2へブホーム
A グループホームとして入居する為の住宅改造。風呂場の改造、便所の改造、入居者の個室、介護者の部屋、室内全ての段差取り除き。

B 各入居者は、女性2名、男性1名で作業所に通

C 築20年の家であるが大家さんの理解もあり、大改造も許可していただき、便所、風呂は車椅子での移動が可能となるように床面を段差無しとし、出入口の有効寸法を80センチメートル

D グループホーム入居者は現在毎日共同生活をいとなみ、全員共同作業所へ通所しています。

講習会実習風景

定例会のお知らせ

(8月) 休み
(9月) 9月2日
午後一時半〜五時
場所 大阪市立
会福祉センター
3階 第4会議室
テーマ「大阪市の高齢化対策と展望」
講師 大阪市民生局 調査課長 石川昭男氏